

【韓国】 映画の中の北朝鮮 表象から見えてくるもの

李 建志

韓国映画に見られる表象の「変化」といえるもので、筆者がもつとも重要視しているのが、韓国における北朝鮮へのまなざしの変化だ。北朝鮮の描き方はそれまでの「敵」というものではなく、「同じ人間」であり、あたたかい「同胞」であり、また先進的な社会を知らない「田舎も」でさえあるという多様な描かれ方がなされていくのである。そしてそれに比例して、韓国の自己規定は、その北朝鮮を受け入れる友好的な人びとであり、また「民族」を歪めた外敵として米國が浮上するという方向へと大きく舵

てはいけない友情を結ぶにいたるが、韓国軍人が北朝鮮領内に入り込んでいることが北朝鮮の上司に発覚してしまい、銃撃戦にいたるといった内容だ。この映画では、事件の核心を探るために中立国の将校ソフィが登場するが、彼女も朝鮮の血を引く存在として描かれる。しかし、南北兵士に心の交流があったことが明らかになることで、むしろ悲劇的な結末を迎えてしまうのだ。このように、人民軍兵士も単に生まれた場所が三八度線の北だったというだけで、基本的には韓国人とあまり変わらない人びとであるという描き方が貫かれており、『シユリ』の北朝鮮人民表象がさらに広がっていることがわかる。

さらに『ブラザーフッド』(二〇〇四)は、朝鮮戦争をテーマにした映画で、貧しい兄弟がふとしたはずみで韓国軍に徴集されてしまう話だ。直系の男性によって祖先祭祀を行わなければならない韓国の家制度では、兄弟の両方が軍にとられるということは危機的である。兄が際だった軍功を立てれば弟の除隊がありえるという約束を上官から取り付け、兄は弟のために「国軍の英雄」にまでなるが、中国軍の参戦で事態は急変する。折しも兄の妻が思想審査の対象となり処刑されるのだが、兄弟はそれに逆らって逮捕される。兄は収容所の爆破で弟が死んだと勘違いし、自暴自棄になって北朝鮮の将校として獅子奮迅の活躍をしてしまう。ここにあるのは、祖国のためではなく家族のために

を切った。以下、韓国における北朝鮮の表象問題を杖に、韓国映画の変化について論じてみたい。

『シユリ』から『JSA』『ブラザーフッド』『トンマッコルへようこそ』へ

韓国における北朝鮮人民の描き方といえば、貧しく虐げられた下層の人間か、狡猾、暴力的、冷酷なスパイ、人民軍のイメージであった。すなわち工作員の内面が描写されることは(韓国に帰順する工作員の表象を別にすれば)なかったといっている。

これに対して『シユリ』(一九九九)の工作員たちはどうだろう。韓国で開発された液体爆弾のCTXを奪い、南北和解に取り込まれる来韓中の北朝鮮主席を韓国大統領とともに殺害しようと画策、女性工作員リ・パンヒは国家情報院のユ・ジュヌオンに近づき情報を得ているという内容だ。『シユリ』に登場する北朝鮮のスパイたちは、暴力的で冷酷であり、主人公のリ・パンヒは韓国内で次々と要人を殺す暗殺者でありながら、一方では恋愛をする女性として描かれる。この映画を先頭に北朝鮮の人びとの内面に踏み込んだ描写をしていく作品が増えていく。

『シユリ』の興行的成功の翌年、『JSA』(二〇〇〇)が公開され、さらなる成功を収めた。この映画では、人民軍の兵士と韓国軍の兵士が三八度線の警備で出会い、持つ

闘う姿であり、それまでの朝鮮戦争の映画とはひと味違う。そこにあるのは反共思想を無化させる「血」への思いであり、畢竟それまでの北朝鮮表象を脱臼していくのである。兄が「バルゲンイ」(アカ)といいつつ北朝鮮軍を倒す姿と、その後「反動」といいつつ韓国軍と対峙する姿には同様の狂気がやどり、北朝鮮と韓国のどちらが正しいという判断をしていないところが見所だ。

この傾向はその後、一般化していく。『トンマッコルへようこそ』(二〇〇五)は、桃源郷のような外部の情報遮断された平和な村に米軍パイロットが不時着し、そこに脱走した韓国軍と敗走中の人民軍が居あわせるといった構造の話だ。当初対立していた韓国軍と人民軍だが、村の雰囲気にはだされ、米軍のパイロットともども村の為に働くようになる。しかし、連合軍はパイロット救出に動き出し、村を爆撃するという。そこで、南北「連合軍」が米軍(連合軍)を迎え撃つのだ。ここにあるのも、人民軍が決して「敵」ではなく、ことばも通じれば話も通ずる「仲間」であり、そこに「敵」はいないことが描かれている。

もともと朝鮮戦争を描く韓国映画にはほとんど米軍は登場しないのだが、ここでは米軍が重要な役割を担っている。いや、それだけではない。上のような一連の流れから、もう少し突っ込んだ傾向を見て取ることも可能だ。それは単なる南北の融和ではなく、その原因を作った外敵

米国を敵視するという傾向だ。これを論ずるために、日本ではそれほど注目されてこなかったB級映画を見ていくこととしたい。これらの中にこそ、通俗的であるがゆえによりわかりやすくこの問題が展開されているからである。

B級映画の中の北朝鮮人民

『SPY リ・チョルジン』（一九九九）は『シュリ』の直後に公開された映画で、明らかにパロディとなっており、その分主人公は格好良くない。作員のリ・チョルジンは、北朝鮮の飢餓問題解決のため、韓国で開発された改良豚の精子を奪うべくソウルに潜入した。しかし、タクシーに乗り合わせた全羅道（長く不当な扱いをされた地域）出身者の運転手や客たちに強盗され、工作資金など一式を失ってしまう。韓国在住の作員の家に身を寄せるが、コメディであるがゆえ、ここでは「家族にも内緒の間諜行動」という常識は破られ、高校生の息子が担任に「お父さんの職業は何だ？」と尋ねられ「間諜です」と答えて殴られる場面さえある。だがこの映画の見所はそこにはない。タクシー強盗が全羅道出身者であり、その彼らがり・チョルジンに目を付けたのが「田舎ものくさい」ところであることなど、北朝鮮出身者が「田舎もの」として描かれていることだ。「持てるもの」韓国」に対する「持たざるもの」北朝鮮」という図式から考えて、あるいは当然の帰

また『特殊作員 ヒドゥン・プリンセス 北朝鮮+韓国 VS CIA』（二〇〇二）は、北朝鮮の最高指導者の隠し子が南北頂上会談を記念した文化公演で来韓し、韓国のバンドマンたちと出会うというもの。CIAがこの隠し子を亡き者にしようとするのに対して韓国情報院と北朝鮮作員がいがいながらも協力して対峙するという内容だ。これは『天軍』（二〇〇五）にも通ずる。南北合同軍事演習の最中に一六世紀にタイム・スリップした北朝鮮人が協力して山賊から村を守り、村にいた若き日の李舜臣（秀吉の朝鮮侵攻の時に活躍した将）を鍛えるというもの。映画の最後に、李舜臣が日本軍を迎え撃つ場面で終了するのが印象的だ。『トンマッコルへようこそ』と同様に、このふたつの映画は南北「連合軍」が外敵と闘うという内容だ。このような描かれ方がなされるのは、金大中大統領（一九九八～二〇〇三年）によって本格化した北朝鮮を敵視しないという「太陽政策」が色濃く反映された結果ではないか。そして、以後十年にわたる韓国革新政権の「南北和解」が北朝鮮の表象を変更する背景となっている。それは、韓国社会が「本当の敵は誰なのか」を見据えた結果であると同時に、視線が「民族」という内側へこもりがちになる不可能性もかかえたものであった。

結ともいえるが、やはり新しい表象だ。

『踊るJSA』（二〇〇三）も同様にコメディだ。北朝鮮の将校と兵卒が遭難して韓国の江原道沿岸まで流される。何とかして北朝鮮に帰ろうとする彼らと、友だちのいない少女（父は警察署長）が出会い、一時はカラオケ大会の優勝賞品である金剛山観光（韓国人に観光を許可した北朝鮮領内の山）を手に入れて北朝鮮に帰ろうとするが失敗し、また舟で北へ帰ることを試みるという内容だ。ここでも北朝鮮将校と兵卒は、そのことば遣いから「中国」朝鮮族の野郎」とチンピラに因縁を付けられる。中国朝鮮族は韓国に出稼ぎに来ることが多く、この人的移動が背景にある、まさに「持たざるもの」たる朝鮮族に対する差別意識であり、田舎ものをみる視線がありありとしている。そしてその朝鮮族と北朝鮮人民が重なっていくのだ。

『ラブ・インポッシブル 恋の統一戦線』（二〇〇三）は、韓国情報院の院長の息子が大学での成績が悪く、中国延辺での南北合同学術調査に参加させられ、北朝鮮のエリート女子大生と恋に落ちるという話だ。彼女もまた恋愛に疎く、野暮ったい演出がされている。このように、韓国側の登場人物が警察や情報院の幹部の家庭に育っているということ、北朝鮮の人が究極の田舎ものとして描かれていることが特徴としてあげられる。これは北朝鮮人民表象の広がりとしてあげられる。

「同胞」の複雑な内面に触れる

それまで外面的で、冷酷、暴力的としてしか描かなかった北朝鮮の人びとを、最初に内面まで描いた映画『シュリ』。ここでは冷酷で暴力的な面を残しつつ、恋愛もする女性作員が描かれた。その後、「北朝鮮の人びと」冷酷、暴力」という図式は大きく後退し、北朝鮮に生まれただけのふつうの人（『JSA』『トンマッコルへようこそ』『天軍』）、そして単なる田舎もの（『SPY リ・チョルジン』『踊るJSA』『ラブ・インポッシブル 恋の統一戦線』）という、より広がりのある描き方がされてきた。そして今世紀になって、太陽政策の影響はより深いところまで達する。南北連合軍が米国に対抗するというもので、『トンマッコルへようこそ』『特殊作員 ヒドゥン・プリンセス 北朝鮮+韓国 VS CIA』、それは南北分断と米国の立ち位置に関する認識の地平が大きく変化したことを意味するだろう。

このように、韓国映画における北朝鮮表象は、この十年の間で大きく変化してきた。しかし、まだまだ足りない部分も多い。それはことば遣いの問題だ。上に見たすべての映画で、北朝鮮出身者のことばは「……ラウ」という語尾を多用する、むしろ一面的な言語観を表している。北朝鮮領内でも中部方言の他、平安道方言と咸鏡道方言という異質なことが存在している。にもかかわらず、北朝鮮の

ことばといえは前述のように一枚岩のような描かれ方がされるのである。これは韓国国内の方言を多様に使っている状態（例えば『ブラザーフッド』の部隊内を見よ）とは別世界のようだ。

以上のように韓国映画における北朝鮮表象は多様化の様相を見せているが、それはまだとば口に入ったばかりだといえる。言語をはじめとした北朝鮮内の複雑で重層的な関係をどのように見せるのか、韓国映画の可能性はまだまだ広がっている。

●参考文献

川村湊（二〇〇五）『アリラン坂のシネマ通り』集英社。

●付記

本稿では、現代の大韓民国を指す呼称として「韓国」、朝鮮民主主義人民共和国を指す呼称として「北朝鮮」ということばを使う。また、朝鮮半島全体を指すことばとして「朝鮮・朝鮮人」ということばを使用する。

また、本稿は科学研究費助成事業基盤研究（B）・「語りの経験ともの語りの修辞学」（代表者・菅原克也、研究課題番号・24320067）の成果の一部である。

②カン・チェギユ（姜帝圭）、③二〇〇四年、④韓国、⑤韓国語（朝鮮語）、⑥劇場公開（二〇〇四）、DVD販売。
 『ラブ・インポッシブル 恋の統一戦線……①남남북녀（南男女女）、②チョン・チョシン（丁楚信）、③二〇〇三年、④韓国、⑤韓国語（朝鮮語）、⑥韓流シネマフェスティバル（二〇〇六）、DVD販売。

著者紹介

①氏名……李建志（り・けんじ）。

②所属・職名……関西学院大学社会学部・教授。

③生年・出身地……一九六九年、東京都。

④専門分野・地域……朝鮮文化研究および比較文学比較文化、朝鮮半島と日本。

⑤学歴……中央大学文学部哲学科卒、東京大学大学院総合文化研究科比較文学比較文化専攻（修士課程・博士課程）。

⑥職歴……京都ノートルダム女子大学人間文化学部専任講師（二二歳から三年間）、県立広島女子大学国際文化学部助教授（三四歳から七年半、のち県立広島大学人間文化学部准教授を経て現職）。

⑦現地滞在経験……韓国のみ（延世大学大学院人文科学研究科韓国文学専攻博士課程、二六歳から四年間）。

⑧研究方法……文化研究（文献およびフィールドワーク）。植民地期の作家やその人を知る人びとと直接会ってたくさんの証言を得てきたことが大きな糧となっている。

⑨所属学会……朝鮮学会、韓国朝鮮文化研究会、国際高麗学会、朝鮮史研究会、日本比較文学会、東大比較文学会。

『JSA』……①JSA、②パク・チャヌク（朴贊郁）、③二〇〇〇年、④韓国、⑤韓国語（朝鮮語）、⑥二〇〇一年、DVD販売。

『SPY リ・チョルジン』……①간첩 리철진（間諜リ・チョルジン）、②チャン・ジン（張鎮）、③一九九九年、④韓国、⑤韓国語（朝鮮語）、⑥みちのく国際ミステリー映画祭（二〇〇一）、DVD販売（『SPY リー・チョルジン 北朝鮮から来た男』）。

『踊るJSA』……①동해물과 백두산이（東海の水と白頭山が）、②アン・ジス、③二〇〇三年、④韓国、⑤韓国語（朝鮮語）、⑥DVD販売。

『シユリ』……①서리、②カン・チェギユ（姜帝圭）、③一九九九年、④韓国、⑤韓国語（朝鮮語）、⑥東京国際映画祭（一九九九）、劇場公開（二〇〇〇）、DVD販売。

『天軍』……①천군、②ミン・ジュンギ、③二〇〇五年、④韓国、⑤韓国語（朝鮮語）、⑥劇場公開（二〇〇六）、DVD販売。

『特殊工作員 ヒドゥン・プリンセス 北朝鮮+韓国 VS CIA』……①위파람 공작（口笛姫）、②イ・ジョンファン、③二〇〇二年、④韓国、⑤韓国語（朝鮮語）、⑥DVD販売。

『トンマッコルへようこそ』……①웰컴 투 동막골（ウェルカム・トゥ・トンマッコル）、②パク・クワンヒョン、③二〇〇五年、④韓国、⑤韓国語（朝鮮語）、⑥劇場公開（二〇〇六）、DVD販売。

『ブラザーフッド』……①태극기 휘날리며（太極旗はためいて）、

⑩研究上の画期……日韓におけるナショナリストの台頭。とくに、韓国でどう見ても民族主義者にしか見えないノ・ムヒョン大統領が「革新、民族主義批判」ととらえられていることへの違和感と嫌悪感が今の研究の基礎になっている。また、在日朝鮮人と呼ばれる人たちの「自己の絶対化」と呼ばざるを得ないような日本批判にうんざりする。その証拠に、筆者は韓国ナショナリズム批判を行い、在日の運動の問題点を指摘しただけで、在日朝鮮人と呼ばれるエスニックグループ出身の有名研究者から、筆者は日本の保守にすり寄る「戦っていない人間」と露骨に言われたことがある。言わずと知れたことだが、もちろん韓国ナショナリズムへの批判や在日朝鮮人運動批判は、日本のナショナリズム批判を大前提として展開している。

⑪推薦図書……河原ノリエ著『いのちのかなしみ』（春秋社、二〇一二年）。

⑫推薦する映画作品……『花と兵隊』（松林要樹監督、二〇〇九年、日本）。